

等あり。但、何れも版行せられず、寫本のみなりといふ。且その寫本とても坊間に傳はれるは極めて僅少なり。『昆陽漫録』及『續昆陽漫録』は先年吉川書肆にて『百家説林』中に收めて活刷したるものあり。然れども『昆陽漫録』の自序に

敦書元文中昆陽漫録一卷を選ぶ。其後屢小冊を著す。今再校して或は去り或は増し、すべて六卷となし、

昆陽漫録と名く

寶曆十三年二月十一日

青木敦書識

とあれば、上掲諸種の隨筆中の記事にして『昆陽漫録』中に收められたるものも少からざるべし。そはともかく、吾人は『昆陽漫録』の一書によりても、十分に昆陽の主義性行等を知ることが得べきなり。

さて、昆陽の爲人に就きては前數節に述べたる所を以て略之を窺ふに足れば、復こゝに記するの要なきが如しといへども、聊約説して、本篇の終結となさん。蓋し、昆陽性温厚篤實にして謙退功に誇らず、しかも斯かる性質の人が或は陥り易き因循姑息の弊なきのみならず、却て進取敢爲の氣象に富み常に自ら進路を開拓して息まず。その學は有用を主とし、思慮周密にして眼をあらゆる事物に注ぎ、一に民生の休戚を以て念となせり。その文藏の通稱、敦書の名、厚甫の字、昆陽先生の號は、共に能く昆陽の性行を表示して餘あり。而して昆陽の一生を通貫するものは、實に誠の一字にして、法名一誠亦最も能く斯の人に適へり。思ふに、昆陽は固より非常の偉人にはあらず、然れども、所謂「恭儉己を持し、博愛衆に及ぼし、公益を廣め世務を開き」たるの人にして、國民としての資格上最も模範とするに足るの一人たるべきは、何人も之を首肯せん。

(完 結)

近世日本畫に於ける二運動の消長

澤村專太郎

すべて事物には順應と云ふことが認められる。順應と云ふことは、内部的若くは外部的の或種の事情に應じて、事物が變化をなしてゆくと云ふことであるが、この内外の事情に應變し行くと云ふことは、あらゆる事物の發達と云ふ事と分離する事の出來ないものである。即ち發達と云つてあるものの中には、必ず順應と云ふ要素が含まれてゐるのであつて、かの進化と云ふ問題に於ける自然淘汰或は適者保存と云ふが如きことは、こゝに謂ふ所の順應の一つの發現と考へ得らるゝ所のものである。

いま藝術の世界に就いて考へてみると、藝術と云ふものにも先づ種々の區別はあるが、其中でも直接に耳に訴へてくるものと、眼に訴へてくるものとが殊に著しいやうである。尤もこの外に嗅覺や味覺に訴へて來る藝術がないでも無い。例へば東洋に於て行はれ來つた聞香と云ふものゝ如きは、一種の鼻の藝術と認むべきものであり、又わが國の茶の湯の如きは、即ち味覺藝術の一種と考ふべきものである。けれども是等のものは姑らく措き、先づ藝術のうちで視覺の藝術及び聽覺の藝術には、特に順應と云ふ事が、種々の興味ある形式に於て發現するものである。こゝには藝術の内部的事情に基く順應作用と云ふことの方は姑らく問はず

して、主として外部的事情に基づく所の順應作用の方を、少しく考へてみたいのである。この外部的事情に基づく順應作用の中でも、如上の二藝術にとりて著しき事情は何かと云ふに、それは二つある。その一つは公開的事情と云ふ事であつて、他の一つは即ち非公開的事情と云ふことである。この二個の事情に應じて是等の藝術は二様の異なる方向に發達して行かうとする傾向を示すものである。試みに之を音樂の方面に就いて考へて見ると、例へば謠曲、長唄の如きものはその性質が大に公開的であつて、之れに比べると歌澤の如きものは非公開的性質のものである。是等は何れもその發達の上よりして自らその特色を形成し來つたものに外ならない。勿論、元來公開的性質のものであつても、それが非公開的事情の下に幽閉せられてゐる時には、何時しかそれが非公開的に進展して、遂にその特性を失ふことが無いでもない。

この音樂に於ける事例は、また其儘を繪畫の上に移して考へる事が出来る。即ち繪畫に於ても公開的方向に發達して行かうとするものと、非公開的方向に發達して行かうとするものとの二様の區別が、其發達の上にて認め得られる。例へば寺院の壁畫の類は大體上前者の方向にあるもので、繪卷物の如きはもと後者の方向に屬するものである。古き時代の事は別として、わが近世に於てこの二様の繪畫が如何なる消長を示してゐるか、と云ふことがこゝには問題とならうとするのである。

近世に於けるわが國の繪畫は、大體の上から云へば、すべて非公開的方面に向つて發達して來たのである。けれども近世の初頭、即ち桃山時代及び徳川の初期に於ては、一時公開的繪畫が頗る隆盛を來たしてゐた。それは如何なる事情のもとに起つた現象であるかと云ふと、當時住宅の建築が大に發達して、之れに伴つて宏壯なる建築物が營まれ、従つてまた是等の建築物の爲めの障子や壁や屏風の類に、裝飾用の畫が作らるゝ

に至つたので、作家は是等の大畫面を大建築物の一部分として適合するやうに取扱ふの必要に迫られ來つてゐたからである。されば當時畫界の重鎮と目せられてゐた諸家は、例へば狩野永徳にせよ狩野探幽にせよ、概してこの種の實際上の必要に適應するだけの才幹を示してゐたことは無論である。もと當時に於ける宏壯なる住宅建築、殊に大名どもに依つて作られた家屋は、建築それ自身が既に個人の趣味を満足させると云ふが如き事に拘束せられてゐなかつた。即ち彼等の家屋に於ける殿堂は、或は會議場、或は應接室、或は宴會場等の公開的なる役目を有してゐたものが少くなかつた。而してまた家屋はその主人公の威容上の一大要素となつてゐたものであつて、その宏壯華麗なることは、自家の權勢を示す一つの手段たりしものである。従つてその障屏が金壁燦然として五彩目を奪ふ底のものたらんとした事は、必しも恠しむに足らない。現時一般に多大なる注意の拂はれつゝある所の宗達光琳の華麗なる畫態の如きも、實は公開的なりし近世初期の繪畫を前提として得られ來つた所の一個の結論と見られ得るものである。

近世の初頭は、一方に於てかくの如く公開的の繪畫が發達すると同時に、他方に於てはまた非公開的の繪畫も行はれてゐた事を忘れてはならぬ。當時非公開的なる藝術の行はれてゐた事に就いては、種々の事情が觀察せられ得るのだが、その著しき一二を挙げると、第一足利期以來盛んに行はれ來つた所の茶の湯と親密なる關係を有する現象である。茶の湯の趣味は何れかと云へば非公開的のものと考えられる。即ち繪畫を鑑賞するにしても出來るだけ自然的であり且つ個人的であらうとするのであつて、概して團体的の風はあまりに奨励せられざるものである。設令茶の湯の方面に多數人を取扱ふ事があつても、それは多數人が多數人として取扱はれるのではなく、寧ろ多數人を個々の人に分つて扱つて行かうとするものである。かゝる趣味が徳

川時代に入つても行はれ、社會の上流や中流に行亘つてゐた。場合によつては平民にまでも及んでゐたのである。この時期に瀰漫してゐた所のかやうな趣味に對して、繪畫に於ても亦之を満足せさせるやうなものが行はるゝに至つたのである。前時代及びそれ以前に於てわが國に舶載せられた所の支那畫のうちで、殊に宗教畫以外の純鑑賞の意味の多數の繪畫が、今日に至るまで大切に保存せられたのも、この趣味に抱擁せられたことの一つの結果とも見られる。第二は建築の方面に於て非公開的繪畫を懸けておく場所が住宅内に設けられた結果、之れに應ずる所の繪畫が絶えず作られてゐた事である。云ふまでもなくそれは「床間」であつて、こゝに掛物を懸けて之を賞鑑したのである。床間を設けることは、既に足利中期以前から行はれてゐるので、此風が近世に入つて愈々盛行したのである。而して住宅建築に於てはこの場所は缺くべからざるものとなつて了つたので、之に依つて之れに應ずる所の掛物畫の奨励せらるゝ結果を喚び起してゐるのである。

とにかく是等の事情によつて非公開的の繪畫が公開的繪畫と相對して、わが近世の初頭に於て行はれてゐたのである。然らば當時如何なる流派の畫が行はれてゐたかと云ふと、その主要なものは即ち狩野派であつた。この狩野派が此頃に於て行はれてゐたこと云ふ事だけを以てしても、既に充分狩野派の一個の特色が観察せられ得るであらう。それは他でもない、狩野派が少くとも、公開的性質と非公開的性質との兩様に適應するやうに發達してゐたと云ふ事である。即ち狩野派の作法によつて大なる殿堂の障壁に公開的なる作品を作るに於ても不適當ではなかつた。又同じ派の作法によつて床間の畫を作つても不適當ではなかつたのである。その後に至つて狩野派が衰へたのは、公開的の繪畫を活用することを得なかつたのと、それが形式に精神を委ねて、一種の典型を作り、遂に内部が空虚となるに至つたことなどに歸すべきであるが、兎も角

兩方面に適する畫法を示してゐたことは、この派の一大特色たるを失はないのである。

狩野派は徳川の中期から以後に於ては、その勢力が漸次衰へたが、之れに對して或は之れに次で起つて來た所の諸、の流派は何うであるかと云ふと、その殆ど何れもは皆非公開的のものとして發展しつゝあつたものである。先づ享保の頃に大陸からわが國に移入せられた文人畫の一流と南蘋一派の寫生とは、共に公開的の方面に於て特色を示さなかつた。殊に文人畫の如きは、その發達の根本に於て公開的ならざるものがあつたからして、之れは勿論のこと、又南蘋派の如きも格別この方面に適當するやうに發達して來たものとも考へられなかつた。是等に次で起つて來た所の圓山及び四條派の如きも亦同様である。唯圓山派の應舉は特別な手腕を有してゐたが故に、大畫面に筆を揮つても公開的藝術として大なる困難に陥らなかつたけれども、もと彼れ一派の製作的態度なる寫實と云ふ點に就いて考へると、この態度は公開的藝術としての繪畫には多少困難なる點を有してゐるものである。蓋し誠實なる寫實は大畫面の處理を困難ならしめ、延いて想化を促すものなるが故である。従つて寫實の脚地にあつて大畫面を處理し、之を公開的のものとして相當の効果を收めようとするには、餘程の大手腕を要するのであつて、應舉の如き力量に依つてのみ收め得らるゝのである。されば其門流の如きは障屏の類の公開性のものに對しては、殆ど何れも之れに應ずる事が出来なかつた而して四條派に至つては、圓山派を愈々非公開的となしたものであつて、圓山派と四條派との相異は、畢竟これは彼れを一層非公開的たらしめたものだと云ふ事に歸する。是等のほか土佐住吉の流派は前代以前から既に非公開的生活に馴らされてゐたのであるが、唯この流に於ては例の宗達光琳の一流が多少公開的特性を發揮せんとするものがあつたことが注意せられる。之れとても徳川の前半期を盛時として、漸次にその特色

を失はんとするの狀態を示した。かくの如き次第なれば、近世の下半期は全然非公開的なる繪畫の盛行した時期と認めても不可なきやうである。かうした事情の下に吾々の前時代、即ち明治時代に到着したのである。

明治十五年に於て繪畫共進會の第一回が開かれ、同十七年に第二回が開かれ、それより以後内國勸業博覽會より延いて今日の文部省美術展覽會に及んでゐるのであるが、是等の展覽會はその目的が技術の獎勵にある事は勿論であるも、その獎勵の結果如何なるものが出來るか云ふ事には、一般は寧ろ無頓着であつたらしい。或は想ふにその當初に於ては無論床間に掛けて好都合なる一種の非公開的の畫を獎勵するにあつたかも知れない。然るに實際に於ては左様には行つて居らないのである。元來展覽會の會場の施設が公開的であるからして、此條件に順應して行かうとするのは當然の結果であつて、事實上その製作はすべて公開的へ公開的へと進んで行つた。加ふるに競技の性質として他の注意を惹かうと欲する事が烈しいからして、競争それ自身が既に繪畫をして公開的性質に一步も二歩も近づけんとするのである。従つてさきにも述べた如く宗達光琳などの公開的性質の作法又は意想が現時に於ける文部省美術展覽會に於て見られるのも自然の勢と云はねばならぬ。

けれどもわが近世の初期に於ける公開的繪畫と現時諸展覽會等に於て見る所の公開的繪畫との間には、又多少の相異がある。それはさきに云へるが如く前者に比して後者が甚だしく競争的性質を有する點である。然らばかくの如く公開的であつて、而かも競争的なる施設は從來全くわが國に於ては見ることが出来なかつたことか何うか。之れは一つの問題である。尤も單に公開的と云ふ點のみより云へば、おもに鳥居派が揮灑し

て來た所の芝居の看板畫の如きもその一種である。是等のほかに於て若し公開的にして且つ競争的なる條件に適當した所のものを、近世の日本に求めるならば、その一つとして予は神社佛閣に於ける繪馬堂を指摘する。

繪馬と云ふのは、もと馬を神社へ献じたのを、後に畫圖の馬を以て實物に代へた風習から起つて來た事であつて、既に平安時代の古に於て此事が行はれてゐる。現存の鎌倉時代の繪卷物に於ては、繪馬の畫かれたるものは決して少くない。けれども是れが愈々發展して來たのは足利時代に入つてより以後の事であつて、此頃には固より馬以外の他の題材が取扱はれてゐた。而して近世に至つては全く一種の公開的にして且つ競技的のものとなつて來たのである。繪馬に於て有名なるは例の嚴島神社であつて、京都にては清水寺、祇園神社、北野神社、東京にては淺草觀音堂、湯島天神等、舉げ來れば尙ほ此外に多々ある。もとこの繪馬堂が公開的であると云ふ事は、第一それが外光を直接に受ける場所であつて、且つ衆人が之を鑑賞すると云ふことに依つて認められる。即ちその看者の中には其地方の人は勿論のこと、その他各地の旅人も少くなく、長崎の人が出羽奥州の客と肩をならべて賞鑑することは珍らしくなかつたのである。第二は作家が相互に競争をなすことであつて、徳川期に於ける浮世繪師の如きは屢々競技的精神を以て畫いてゐたのである。また此畫に依つて名聲を博することも、今日の公設展覽會に於て少壯作家が名聲を博すると略ぼ相似たるものがあつた。尙ほまた之れに對して評判記、即ち今日謂ふ所の一種の批評なども屢々書かれたものである。この評判などは徳川期の輕文學の上に於て吾人の常に經眼する所である。とにかく、事情によつて繪馬堂の繪額は公開的特色を保持してゐたのである。

凡そ繪畫の公開的なる特色は何うであるかと云ふに、それは徹頭徹尾、刺戟的と云ふことに歸する。即ちその内容に於てか又は外形に於てか、何れにしても刺戟的ならんとすることはである。形式的なる方面に於ては、例へばすべて其表現法を誇張的となすが如きは是れであつて、同じ墨線を用ゐるにしても焦墨を好んで用ゐる、又着色に於ても努めて濃厚のものをを用ゐやうとするのである。坊間において、現時諸人が寺社に納める所の小さき繪馬の如きものが、廣やかな繪馬堂に於て可成に自己を主張してゐるのは、その色の調子が非常に強いが爲めであつて、之を廣やかな室内に懸けておいても四周の景趣に壓逼せられずゐるのは、頗る興味ある事實と云はねばならぬ。次に内容の方面に於ても所謂題材に於て特に工夫が凝らされてゐるのであつて、出来るだけ奇抜な人の意表に出づるやうな思想を採用せんとする。かくの如く公開的繪畫が内容と外形とに於て刺戟的なる性質を有することは、一面に於て這般の繪畫の特色であり長所であつて、而かも他面に於て弱點であり、缺點たるべきものである。此問題を以て公設の美術展覽會を考へると、恰かも之れに出陳せられてゐる作品に於ても、此特色を示してゐるもの、或はその弱點を曝露してゐるものなどの區別が認められる。従つて繪畫と云へば今日の展覽會に見るが如きものばかりが優れてゐると考へるのは不可である。蓋し現時の展覽會、殊に文部省美術展覽會の如きは、寧ろ公開的方面に於て特色を作り來りしものであつてそれ以外に於て非公開的方面に於ても特色のあるべき繪畫が儼然として存在すべきであり、又せざるべからざるからである。近時この方向に對して一般の注意が向けられて、最近の文部省美術展覽會に於ても、小品的作品の奨励と云ふことが問題となつてゐる。けれども事實上には未だその充分なる結果が收められてゐない。想ふにそれは這般の展覽會の性質が公開的のものであるに、之を非公開的のものに無理に誘導せんと

努むるに依るのではあるまいか。若し果して然りとすれば、之はその根本に於て困難なる點を有してゐるものと云はねばならぬ。従つて理論上、或は主義としては無論結構なる事なれど、實際上困難の存するが爲めに良好の結果を收め難きは止むを得ざる事である。或は想ふにかの茶湯に於て見るが如く、多數人を個人として取扱ふと云ふやうなる會場を設けるか、又全然作家個人の展覽會の如きもの、若くば數人の小團體の作品展覽の如きものが奨励せらるゝならば、此方面に於て多少効果を見るに至るかも知れない。それは兎にかくとするも、官設の美術展覽會を始めとして諸種の施設が、今日までの所にては、公開的藝術としての繪畫の奨励をなすに、相當の結果を收めて來た事を認めなければならぬ。殊に徳川の末葉に於て概して非公開的になり了つた所の後を承けて、此結果に到達してゐる事は、歴史的見地より見て、興味ある事實と云はねばならない。換言すれば明治以後の繪畫が一面に於て大に公開的に發展して來たと云ふことは、少くとも現時及び今後の日本畫を考へて行く上の一個の注目すべき點であり、又史的事實としても忘るべからざることである。(筆記)